

# 平家物語

「祇園精舎の鐘の聲、諸行無常の響あり。  
沙羅双樹の花の色、盛者必衰の理を顕はす——」

流れるような調べとともに壮大な物語の始まりを予感させる一節は誰もが耳にしたことがあるだろう。『平家物語』。日本で最も有名な古典的名作だ。

平家物語は平安時代の末期から鎌倉時代の始まりまでを描く、史実に基づいた軍記物語だ。一武家に過ぎなかった平氏が急速に台頭し、やがて平安貴族をも凌駕して比類なき栄華を極める様。そして、かつては虐げた源氏との争いに敗れ、わずかな間に権勢を失い滅亡にまで追い込まれる様。歴史を舞台にした劇的な展開は古今東西並ぶものがない。

しかし、物語としての平家物語の魅力はそれだけにとどまらない。「風の前の塵」という言葉さえ生やさしいほどの激しい時代の流れにあつて、それに乗じようとする平家一門とその家臣、流れに逆らい討たれ追われる上皇や僧兵、そして武家の抗争にただ翻弄される貴族たちの人間模様。時に軍記物語としての在り方にそぐわぬほどの細やかさで描かれている。野望、栄光、嫉妬、諍い、葛藤、別離。歴史の部品に過ぎない人々の無力さや人間らしさは、大きな物語の中の一場面でしかないがゆえにいつそう強く胸を打つ。

また、随所に現れる和歌も特筆すべき見どころだ。武家でありながら平安の貴族文化を嗜む平家の人々。彼らが滅びに際して詠み残す歌は物語全体に通じる儂い優美さをたたえて一族の最期を飾る。

当然だが、平家物語は古語で書かれている。いくつか現代語訳も出版されているが、その本当の魅力を味わうためにもやはり原典を読むことをおすすめしたい。数百年の長きにわたり琵琶法師によつて語り継がれた文は、口承というその伝承の形から絶え間なく洗練され続け、流麗にして豪快、詩的でありながら平易で明瞭な姿をしている。古今日本人を魅了し続けてきた名文だ。初めは少し戸惑うかもしれないが、すぐにその美しい調べに酔いしれることができるだろう。

いざさらば涙くらべん郭公われも愛世に音をのみぞ鳴く  
(終巻「灌頂巻」より)



作者不詳『平家物語』  
講談社文庫 他